# 第４回稲毛区地域福祉計画推進協議会議事要旨

【１】開催
日　時：平成２７年３月１７日（火）１４時００分～１５時３０分
場　所：稲毛保健福祉センター　３階　大会議室
出席者：委員定数　　３０人
　　出席委員数　２３人
　　事務局　　８人　オブザーバー　２人

【２】次第
１　開会
・稲毛保健福祉センター所長挨拶
・委員長挨拶

２　議題
（１）第２期稲毛区地域福祉計画重点項目の総括について
大野所長より、委員から報告された意見・情報提供をまとめた資料について、説明。

委　　員：重点項目について役員で話し合い、協力して活動している。

委　　員：今年度初めて参加した。内容については特になし。

委　　員：書かれている通りだが、もう少し深みのある活動をしている。折に触れ情報提供したい。大体順調にいき、毎年効果を上げていると思う。

委　　員：六つの項目のうちコーディネート組織というのがよく理解できない部分である。地域事情や役員のパーソナリティにより事業が進んでいる。３項目目の、活動の中核となれる人材の発掘では、「発掘」という言葉も努めて避け、自然発生的に出てくることを期待している。その方がより説得力がある。発掘とは特別に優れた人が誰々を見つける、ということ。我々には優れた才能はない。やはり後姿、実績が明らかにしていくよう、地域活動を重点に置いていかなければと思っている。当地区では大きな行事３つについて、１００名を超える役員が運営しているが、これをとても大事にしているということを伝えたい。
　安心カードは冷蔵庫に置くタイプにしていたが、ある時路上で倒れた方がいて、回復するまでどこの誰かわからないことがあり、迷子札タイプも全員に導入している。これは敬老会の案内を配る時に同封している。

委　　員：第２期の計画には途中から参加した。当地区は高齢化率が高く、役員のなり手がいない。新たな担い手探しに苦労している。いきいきサロンでは様々なことをしているが、大きな行事は年１回の世代間の交流イベントで、これは成功した。また車座という健康講座などを開催している。地区部会活動に対する地域の方の理解がまだまだ十分ではないが、自治会と民生委員の助けを借りてやっている。これからも少しでも推進していきたい。

委　　員：千葉市内の老人会の半分は連合会に加入していない。できれば全国の老人会組織に加わって一緒に勉強していただきたい。高齢化と若い方が入ってこないことで会員の減少が深刻である。担い手は発掘というより出てきた人の中から大切に育てていって、次代を担って

いただきたいと考える。老人会は３０歳もの世代の差があり、活動そのものが世代間交流となっている。毎月、参加者間で情報交換をしている。

委　　員：当地区では各委員会で個々の活動をしているが、町内自治会との連携が不足していると感じる。重点項目については、微力ながらも頑張って活動している。

委　　員：この会議の発足当時から参加しているが、当初は熱意を持って考えていたところ、方向性が違ってきたと感じる。福祉は地域の方々が担っている。手をつなぐ育成会の会員は様々な地区から参加されているので、私自身当初いろいろ考えていたことがなかなか流れに乗らなかった。努力が足りなかったと反省している。

委　　員：小中台東地区部会エリアの報告の１と４、２と３はほぼ同様なものととらえている。テーマがはっきりしてくると、それをどうするかということについて、地区部会の中だけで対処することは難しい。関係する外部の機関や組織と協力なしには進めないという認識を深めている。人材を育成するには、効果的な方法は見当たらない。地区部会そのものの活動をいかに地域の方に知っていただくかを進めていくしかない。その方法としてかわら版という広報を全戸配布で発行している。読んでいただいている方には関心を少しずつもっていただいていると思う。安心カードについてはほぼ計画通り。年齢に関わらず全戸配布という自治会もでてきており、広がりがある。災害については毎年何らかのことをやっているが、まだまだ防災・減災への意識が高いとは言えない。毎年やっていくしかないと感じている。

委　　員：小中台西地区部会エリアの報告は書いてある通りである。小中台中学校区を二分割して東と西に分け今年で６年目になる。細長く範囲が広い地域である。スタッフは若く有能な方がたくさん育っている。今のところ特に困ったことはない。事例として一昨日茶話会を開催したが、７５歳以上の方にお声掛けし、毎回２００名以上の参加がある。午前・午後に分けて開催している。５０名以上のボランティアにお世話になり、楽しく一日を過ごしている。

委　　員：意見・要望としてお話したい。毎年九都県市の防災訓練で、地域の方の参加を期待しているがなかなか少ない。地域の方のご協力を得て、災害時の障害のある方への援助の仕方など学んでほしいと思う。地域の中で様々な方が生活しているが、高齢の方、障害の方の緊急事態の際のご近所の助け合いが当然あるかも知れないが、聴覚障害の立場からも切にお願いしたい。聴覚障害の協会があり、毎月防災委員会も開催している。命をどう守るかの勉強をしている。例えば私の障害は外見ではわからないので、バンダナのようなものをつけて「私は耳が聞こえません」という表示をしたり、手話が少しでもできる方には「手話ができます」というようなものもつけてもらえれば、私たちは非常な災害時でも安心して地域で過ごせるのではと思い、お願いと感想を述べさせていただいた。

委　　員：民生委員としては青少年育成委員会や地区部会、スポーツ振興会、自治会などいろいろな組織と連携して活動している。個人的には、いきいきサロンを１５年ほど前から始めており、現在は午後の開催とし、年齢制限なく中学生も一緒に参加してもらっている。お茶を飲みながら折り紙をしたり、いろんなお話をお年寄りが聴く側になったりして、親には言えないことが情報として入ってくるようになった。そういうことを学校と話し合ったりして、川崎のような事件に繋がらなければいいと思いながら、今後も続けていきたい。民生委員の顔を覚えてもらいたいので、朝のセーフティウォッチャーや放課後子ども教室など、

いろいろなところに顔を出すようにしている。また、ボランティアについては育成とまではいかないが、私は小中台東地区部会に所属しているので、事業実施の際、参加してくれたボランティアクラブの中学生に、お互いに「また来年も」というようにつなげている。

災害時は、民生委員のところに災害時要援護者名簿が全て来る。安否確認については自治会の負担が大きいと思うが、協力して一緒に進めていかないといけない。年１回の防災訓練では、安否確認や炊き出しを行うが、関心を持っている方は１／３くらい。働きかけが必要。

委　　員：この会議をしてきた感想としては、歩みは遅いが少しずつ前進していると思う。地区で大事にしてきたこと、していくことは、少数者で仕切るのではなく、できるだけ皆で話して一致したところで協働の努力をしていくこと。ひとつひとつの取り組みを行事の消化ではなく、まちづくりにつなげていくということ。活動を行う中で少しずつ問題意識や経験の共有ができると感じるし、これからもそのスタイルは崩さずに続けて行きたい。今後の課題は、高齢化の進む地域は役員の高齢化が進んでおり、新たな担い手を作ることがなかなかうまくいっていないこと。また、２１ある自治会の役員が半分以上一年交代であること。活動の蓄積、協働の努力の蓄積が大きな課題だと感じている。

委　　員：社協地区部会に対しての認識が低い。高齢化に加え、若い人たちを引き上げていくことが難しくなっている。安心カードや災害時に対応する防災訓練など、社協と他の団体との協働で行っているが、そこまで持っていくのが難しい状況。社協とは何かをもう少し広めていければ、もっと進んでいくのでは

委　　員：活動については井村委員の報告のとおりで、付け加えることはない。次期計画にも協力していきたい。

委　　員：山王中学校区の自治会は１１あり、会員数は４，３００世帯。古い集合住宅が多いところは自治会加入率が低い。地区の団体には第３７地区連協、山王地区部会、スポーツ振興会、３０５地区民児協がある。民生委員は社協の役員として活動していただいている。スポーツ振興会、社協は自治会を支えている団体である。いずれの団体にも会費を出している。

人材育成については、自治会の例をとると組長さんの経験のある方から理事を選ぶなどのステップがある。災害時については千葉市の取り組みを理解してもらえるといいと思う。避難所の開設について訓練しているが、それを通じて災害時に対する地域の住民の研鑽を積むことができ、地域の活性を図ることができる。

委　　員：公民館に関わることで、指定管理者の話が出ているが、地域で運営することについて相談している。最近、教育委員からよい提案があり、それを議論している最中である。

委　　員：公募で参加している。現在、緑・黒砂地区部会で活動しているが、見守りなど新しい活動を始めようとした時に、地域の中では自治会や老人会など、すでに何か始めているところがある。こういう活動は時間をかけて皆が理解しあって進めていくことだと思う。「無事ですタオル」なども、一つの自治会が始めたものがだんだん広まった。色々な良いことが皆に広がって行けばよいと思う。地区部会では、ふれあい食事会でボランティアの方同士の交流会をしたときに、この事業を社協がやっているということを知らない人もいたので、いろいろと情報提供して理解が深まり、さらに他の活動へも参加いただける。災害については参加しない方はずっと参加しない。ここが変わらなければ地域が変わらないと感じる。

委　　員：自治会でこれからやろうとしている安心カードなどの活動を報告した。自治会の中での支え合いの体制はほぼ出来上がっていると感じている。

委　　員：合同で防災訓練を行っている。町会の活動について、住民の関心が低いと感じる。いきいきサロンも決まった人が参加している。関心のない方にも声かけしたら、少し意識が変わってくるのではないかと感じる。先日コーディネートについてわからないという声があったが、生涯学習センターで研修を受けた。重要なことだと思うので、ぜひ意識を持って養成していってほしい。

委　　員：これからの社協のあり方、地域のあり方は、縦割りでなく六団体が一緒になって綾織りでやっていかなくては。民生委員を長くやったので自分の地域の方のことは全部わかっているが、一人がわかっていても仕方ない。要援護者は地区の全部の会員だと考えている。どのようにして縦割りを直していくか。社協はどうあるべきか、４１地域をどうしていくか、考えていきたい。一番の心配は、大災害では経済的な復興はできても、心の復興ができるかどうか。日頃のお付き合いができているかどうかである。六団体がひとつになるべきである。
５つの避難場所があるが、運営委員会ができても、皆がどう生き延びていくか勉強していかなければいけない。行政からの情報など、全てをまとめるところとして、公民館を災対本部にする構想があり、それを進めていきたい。

委　　員：３０１地区は中央区、若葉区、稲毛区にまたがる地域であり、民生委員の区域の名前とした。地域の活動している人、組織の連携・協力はとてもうまくいっている。地域全体で取り組むことがあれば、社協が音頭をとるということになっているが、助成をいただいてやっていたものが、現在まで続いている。社協には様々な団体が入っていただいており、「３０１地区部会」がやるのでなく、「３０１地区部会エリア」でいろいろなことに対応できている。計画上でも「エリア」としたことがよかった。また災害時に対応した地域住民の研鑽では、「無事ですステッカー」を安否確認のために作成した。事が起きたときには、手を差し伸べてもらいたい人も何か意思表示をすることになっている。してもらうばかりでなく、何かしたいという声から。ある町内会では１週間に一度の見守り・支え合い活動の取り組みにも活用している。これが広がってくれればいいと思う。

委員長　：２０地区町内自治会・青少年育成委員会、地区部会、コミュニティ懇談会、スポーツ振興会等の各団体が地域を挙げて連携している。公民館なども参加している。安心カードについては千草台自治会として、ＵＲと連携して作成して大変役に立っている。

（質疑）

委　　員：種池委員に質問だが、六団体とは何を称しているのか。

委　　員：中学校区内の４１地区、スポーツ振興会２つ、民生委員・児童委員、青少年育成委員会、社協地区部会のことである。

事務局　：本日欠席の公募の委員より、２度ほど足を運んでいただき、ぜひ推進協に質問としてあげていただきたいとのことだったため、代読させていただく。

（情報・意見・質疑など）

委　　員：当地区で行っている避難訓練についてお話ししたい。私たちの防災会では、家族構成や支

援を必要としている方がどのようなことを援助して欲しいかを、調査をして大体把握している。災害時の訓練では「無事ですタオル」をかけていただくが、かけていなければ要支援者と判断し、事情をきいて本部に知らせて援助をする組織になっている。民生委員さんも名簿で把握しているので確認することになっている。支援物資は小中学校・公民館３か所、中学校も今年から入るが、備蓄があるところに名前を記載すればもらえる。役所の方も配付物の配慮をしていただけると思う。

目印については、誰が何の役をやるということは決めておらず、倉庫に役割が書いてあるものを見て、「本部」、「衛生班」など、とうちゃ方が自由に協力してやっていく。受付をしたときに高齢者なら赤、子どもは黄色やピンクというように障害のある方も受け付けた時に色分けしたテープをつけている。松川さんの「要配慮者」という表現はとてもいい。不安に思っていらっしゃるようだが、いざという時には皆たすけあいの心があって大丈夫だ、と信じていただきたいと思う。

委　　員：昭和３９年新潟中越地震の際の体験をお話ししたい。災害はいつくるかわからない、自治会長さんがどこにいるかもわからない。地元にいる人がすぐに立ち上がらなければいけない。泥棒もたくさんきた。男は警備もしなければいけない。いざとなるとその場で考えなければいけない。自治会の会員に諮ってもらうのが一番。個人情報などの問題あるが、自治会の会員になって隣近所仲良くし、把握し合うしかない。

委　　員：災害時の危機管理体制について、行政の対応を説明して欲しい。

事務局　：担当の稲毛区地域振興課土屋から、千葉市の危機管理体制について説明する。千葉市には全地区に避難所運営委員会を設置しており、これを活用して訓練をしていく際、このようなことについても考えていく。稲毛区としては必要な物資をお貸しすることを考えている。表示を見やすくするものなど。松川委員も関係しているコミュニケーションボードを避難所に設置してあるが、今後障害者用の備品をどう設置していくかを考えていく。近所・自治会等が支え合い、避難行動要支援者への支援体制を作ることが第一。市としても認識しているところである。区役所もその窓口としてやっていきたい。

委　　員：在宅避難者に物資を配布する制度について、行政としてはどういうふうに考えているかまとめておいて欲しい。自宅での避難を勧めていても、その先がない。皆避難所に行かなければ物資をもらえないと考えている。ぜひシステムをはっきり決めて、皆さんに宣伝していただきたい。

事務局：要望としてそういう声はお聞きしている。防災対策課でも考えているが、あくまで物資の配付は避難所になると考えている。並ばなくてももらえるよう、助け合いの活動などで何とかならないか。行政が持って行くことはできない。要望としてはよく聞いている。

委　　員：各自治会で避難所に行けない方の分は、取りまとめて避難所から物資の支援を受けて欲しいと言われ、そう理解していたが。

事務局　：市が物資を運ぶのは避難所までという意味である。その後自治会で配付していただく体制がとれれば、そういうやり方もできる。ただし、避難所でない特定の場所に持っていくことはできない。

（２）支え合いのまち千葉推進計画について

高齢障害支援課より、計画の最終案について資料に基づいて説明した。地域福祉推進専門分科会にて若干の修正があり、反映したものを５月頃に委員に配付したい。

（質疑）

委　　員：この冊子を委員に配付するという話だったが、計画を実体化するために要請や問題提起があったのに、委員のところだけでなく、自治会等関係団体などに広く配付することを考えていかなければ進まない。検討していただきたい。

事務局　：地域福祉課では、前期の反省を踏まえ、委員の皆様にはもちろん、町内自治会及びその班や組は２４，０００ほどあるが、配付する予定である。その他地区部会、民生委員にも配付して周知していく予定である。

（３）その他

支え合いのまち稲毛（稲毛区推進協議会だより）について

社協稲毛区事務所より、紙面内容について説明した。掲載希望記事が一件あったこと、３月中の発行を予定していることを報告。質疑なし。

３　閉会

事務局が閉会を宣し、第４回稲毛区地域福祉計画推進協議会は散会。